三、寛政の鯨

　「なんだ、なんだ、あれは？」
　「見ろ！沖に黒くてでっかいものが・・・」
　初めて見る鯨に、漁師たちは、身ぶるいがしました。この知らせで、町中は大騒ぎになったそうです。
　今から約二百年前の寛政十年（一七九八）五月一日のことでした。前の晩からの暴風雨によって、一頭の大きな鯨が、品川沖にまぎれこんだのです。日頃小舟でタイやカレイを採って暮らしていた漁師たちも、かねてから話しには聞いていましたが、鯨を見るのはみんな生まれて初めてです。まして、捕まえたことのある者など一人もいません。
　品川沖にやって来た鯨を、みすみす逃したとあっては、品川漁師の恥とばかり、みんなで船を出して鯨を取り囲みました。力いっぱいに船ばたをたたき、ホラ貝を吹き鳴らし大声をあげて、命がけで鯨を天王洲の方へ追い込むと、びっくりした鯨は、洲を飛び越えて逃げようと思いきりはねたところ、逆に浅瀬に乗り上げて動けなくなってしまいました。漁師たちも、船から飛び下り、ついに鯨を捕まえ、歓声を上げ、その大きさに驚いてしまいました。そのはずです。長さが九間（約十六メートル）、高さが七尺（約二メートル）もあったのです。
　「品川沖で生きた鯨を捕まえた。」という知らせが江戸中に伝わりました。そして、江戸の町はもちろんのこと、近くの村むらからも、鯨を見ようという人々が押し寄せました。
　鯨は、岸から三町（約三百メートル）ほどの沖にいます。見学に来た人々は、先を争って船を借りたので、その代金はうなぎのぼりになり、漁民のふところには大金が入ったそうです。
　この話しは、その日のうちに江戸城にも伝わり、翌日代官大貫次右衛門の使いの者が、調べに来るとともに、将軍からも「鯨をぜひ見てみたい。」との仰せがありました。
　五月三日、漁民たちは、鯨に縄をつけて船で浜御殿（現在の浜離宮恩賜公園の中にあった御殿）の沖まで引っ張っていきました。将軍徳川家斉は、御殿から時のたつのも忘れて眺め、たいそう喜び、漁師たちに、「猟師町元浦」と書いた旗を贈ったそうです。
　この後鯨は、再び元の品川沖に戻されて、人々が見学しました。“将軍様御上覧の鯨”として、人気がますます高まって、連日多くの見学人がおとずれたそうです。そして、鯨の絵を染め抜いた手拭いや、鯨にちなんだ食べ物が一斉に売り出され、滝沢馬琴の「鯨魚尺品革羽織」や十返舎一九の「大鯨豊年貢」などの本も作られました。
　また、「品川の沖にとまりしせみ鯨みなみんみんと飛んでくるなり」という狂歌が作られて流行したそうです。
　やがて、鯨も、日がたつにつれて腐りはじめ、その匂いが一面に広がったため、漁師たちは、鯨を解体して油をしぼり、骨は利田神社の境内に埋め、その上に碑を建てました。碑には、その頃の有名な俳人、谷素外の
　江戸に鳴る 冥加やたかし なつ鯨
の俳句が刻まれています。
　その後、品川沖には、文政五年（一八二二）と嘉永四年（一八五一）の二度、鯨が現れたという記録が残されています。
　「鯨塚」の碑は、品川の漁師たちが、鯨の霊をなぐさめ、感謝の気持ちを表したものといえましょう。この碑は、江戸時代に動物が人気を集めた三大事件と言われる「享保の象」※一・「寛政の鯨」・「文化のラクダ」※二のうちのただ一つ現在に残る記念碑です。
※一　享保十三年（一七二八）に、中国人商人によって、二頭の象　　が長崎港に到着した。象は、長崎の本善寺に入ったが、うち一頭はここで死んでしまい、残る一頭は、翌年三月十三日に長崎を出発して、京都で天皇に観覧されて、その後江戸に向い五月二十七日に江戸城で将軍吉宗に観覧され、江戸の町に象ブームが起った。

※二　文政四年（一八二一）四月に、オランダ船によって、長崎にペルシャ産のラクダ二頭がもたらされ、七月には京都で公開され、この後、江戸でも興行が行われ多くの見物人が訪れたという。

利田神社と鯨塚

撮影日：2008年(平成20年)12月 8日

（「しながわweb写真館」より）

